

雪舟筆「天橋立図」と模本について

Concerning Sesshu Toyo "View of Amanohashidate" and its copy

地域キュレーションコース

形部 里帆

Katabe Riho

研究目的

雪舟筆「天橋立図」(京都国立博物館蔵)は日本三景にも数えられる天橋立を描いた作品である。「天橋立図」を描いた雪舟は室町時代の画僧であり、その画業は後世に受け継がれ、多くの画家に影響を与えた。「天橋立図」も同様に、その図様を模写した作品として、現在約五本の模本が確認されている。

「天橋立図」には多くの研究の積み重ねがあるが、制作年期、制作目的等不透明な点は多い。また、「天橋立図」の模本は以前より注目されてきたが、模本全てを網羅的に比較した研究は少ない。そのため、本稿では雪舟筆「天橋立図」の模本の図様の比較検討を行い、雪舟の「天橋立図」の複数本の制作について明らかにすることを目的とする。

作品分析

模本の図像分析を行うため、第二章では雪舟の「天橋立図」の分析を行った。第一章にて、「天橋立図」研究における問題の所在を明らかとし、「天橋立図」の構図の組み立てについて検証を行った。「天橋立図」の特徴的な右から左上部へと続く海岸線に主山を配置した構図に注目し、それらの特徴を持つ作品を提示した。

雪舟が学んだとされる南宋期の中国における類似作品は筆遣いに異なりが見受けられるが、明代の同時期における作品に「天橋立図」と同様の筆様、構図の特徴を持つ作品がある。画家同士の直接的接触は認められないが、雪舟、そして明代の画家の学習の成果として、同様の特徴を有する作品を生み出したことは、注目すべき点である。

第三章では、模本の図像比較を行った。本稿では、狩野常信が制作したとされる二幅の「天橋立図」(以降常信本)と狩野探幽が制作した模本(以降探幽本)に注目し、常信と探幽の模写の特徴を踏まえた上で、常信本と探幽本の検討を行った。

常信本については、雪舟筆「天橋立図」(以下京博本)との筆遣いの異なりから、常信本と同一の筆様が見られる雪舟

の作品を提示し、原本が雪舟制作である可能性を示した。

探幽本については、京博本の写しと考えられているが、本稿では、画面中央に描かれる智恩寺や橋立に異なる描写が見受けられる点から、現存する伝承等を踏まえた上で、探幽本は京博本とは異なる原本を模写したものである可能性について言及した。



図1 雪舟筆「天橋立図」(京都国立博物館蔵)(出典:国立文化財機構所蔵品統合システム)

結論

模本の比較検討については、先行研究において指摘されている通り、雪舟が複数本の「天橋立図」の制作を行った可能性があると推察する。

図様の比較から、千秋文庫所蔵の模本以外は、京博本とは異なる作品を写したものである可能性を示し、「天橋立図」複数本の一連の制作において、橋立等にみられる図像の変容を指摘した。また、伝承等を踏まえた上で、探幽本は籠神社に伝来する「天橋立図」を模写したものであるという可能性を提示した。

しかし、探幽本は京博本との図様の異なりを除くと、京博本は山内家所蔵以前に丹後に所在し、その図様を探幽が現地で写したものととも考えられる。また、筆者は作品を実見できておらず、図版で確認できる範囲のみでの比較にとどまる。そのため、雪舟の「天橋立図」の伝来を明らかにするためにも、模本の制作背景等について、より詳細に検討する必要がある。